

私は女神と

茨田 凜

あの状態で雨を避けたいとは思わなかった。そんなのは手遅れだった。傘を差したのは諦めの形だ。何も残らない手の平で帰路につく。歩きながら、空ではなく傘のナイロン地を見上げていた。限りなく無害な色だと思う。ピンクの媚びた調子も、白の完璧主義も持ち合わせていない。かと言って、中間にも位置しない。この柔らかな桃色が哀しかった。きつと空からだったら、灰色の中に一つ、シャツに零れた涙の跡みたいに見えるんじゃないだろうか。

アパートに近づくにつれ、ロサへの思いは沈静していった。灰色に打たれた桃色が、無慈悲に脳内を染め上げていく。一方、秋の雨に濡れた体が重い。ふとかざした右手は白く、節々に紫が浮き出していた。びしょ濡れの服から冷たさが伝わる。絶望的な気分が増すのを感じていた。沈静と言っても、別に気分が悪いのは変わらないのだ。ただロサという複雑さが消えた。それだけ。

部屋に入ってからのこととはもう殆ど憶えていない。時計を確認しないでしまったこと。真っ暗であったこと。そして喉が痛くなるくらいに、激しかった雨音。これらが、唯一憶え

ていたこと。

そのまま深い眠りに就いた。

夢は見なかった。気がつくとカーテンから月明かりが差し、畳を青く照らしている。喧騒と離れた場所に建つアパートは、人工灯の煩わしさと無縁だ。絶えずだるさを訴える体を引きずって、カーテンを開ける。満月。なるほど、やけに明るい訳だ。アパートの隣、電波取りのアンテナばかり長いボロ家の屋根に、月が氷のように浮かんでいた。

私は楽園の終焉を見たのだ。

ぼんやりとそんなことを思う。屋根の上の雑草がそよぐ、みずぼらしい様子が目に入っていた。見渡せる家々の窓には、全て明かりが灯っている。そんなに遅い時間ではないらしい。テレビの低いノイズのような音も、小さな笑い声も響いてきた。

カーテンを閉じ明かりを点ける。肌着だけだったので、タンスの中から寝巻きを取り出して着、台所に水を汲みに行った。喉がとても渴いている。満たされた透明のコップをあおると口内の粘り気がたちまち消え、一方で少々腹が痛んだ。空っぽの胃がぎゅると鳴る。

(お腹空いているのか)

意識せず手が腹にいった。薄い布地を通し、手の平の温みが吸い込まれていく。指を折り曲げてみて返ってくる感触が

あまりに頼りなくて、随分痩せたのだなあと改めて思った。何だか夏に戻ったようだ。あの庭から抜け出し、電車も使わずここに帰った日に。今日と同じように、空腹という眼鏡を以って、あの日も何かを見つけたのだった。

自然と冷蔵庫に手が伸びる。ああ、こんな機械がある、としみじみ感じていた。プラスチックの取っ手が重く冷たい。中の電気に顔を照らされるのが妙に新鮮だった。食品には手をつけず、しばしばうつつとする。長い旅路から帰ってきて、初めて自室の扉を開けたような——性懲りもなく始まりそうな妄想を破ったのは、私の咳だった。不意に喉からせり上がり、肩を跳ね上げ背を丸めさせる。冷蔵庫の扉を閉めた。今更ながら漏れた冷気に震える。

私の体は風邪をひいているようだ。意識すると体のだるさも冷たさも、たちまち緊急を要してくる。私はさつき開けた扉の上、冷凍の棚から白米を取り出し、電子レンジに放るとスイッチを押した。チン、と音が鳴る間用意した鍋に、温めたそれを入れ粥を作る。粥という食事は身体の不調を連想させるものなのかもしれないが、特に意識せず食べた。食器の片付けもそこに布団に潜り込む。薬を飲み忘れたことに毛布を被ってから気づいたが、億劫でまた這い出る気がしなかった。

それからの時間はあまりに濃密で空虚だった。柔らかいというよりはただ立体的で丸みを持った空気に、意味もなく圧迫される。私は眠れなかったのだ。三時間程過ぎた頃、効果

があるだろうと思ってようやく薬を飲んだが、眠気はまったく起こらなかった。

私は久しぶりに平凡なことを、何度か同じ講義で隣に座った女学生との妄想の会話とか、今度スーパーに言って何を買んだとか、あの小説の主人公はどうすれば恋人を失わずに済んだとか、そういうことを思った。小説の主人公が恋人を刺してしまつてから、間違いに気づく運命のどうしようもなさという、私には何の関係もないことに頭を悩ませる。しかし、それは本当に現実味のないことで、主人公が恋人の腹にナイフを刺した時の感触や、抱きかかえれば大量の血が自分の膝を赤く染めた、その夥しさを真に思つても、私にとつては非常に穏やかな時間となつた。見知らぬ人の噂話をしていくようなものだ。自分の頭の中で考えているのに、他人事みたいだ。ゆるゆると落ちる紐のような時間。砂時計の砂とは違う。もつとだるくて緩やかに繋がっていた。平らなガラスの底に、紐はゆっくりとどろろを巻いていく。それを引つ繰り返しても、再び落ちていくことはないだろう。

その紐が全部落ちきった頃、私は何故か両親のことを思い出していた。生温かかった脳内の温度が、すつと下がる。いつの間にか閉じていた目を開いた。ぶら下がり円を描く蛍光灯や、アメーバもしくは何か怪物の目のように見える天井の模様がすぐ目につく。それらは幼い頃、両親と川の字になつて寝た部屋のものに、どことなく似ていた。咳は出ないが、熱と汗がだんだんと私を襲ってくる。腕は毛布から出して

た。そういう寝方というのもどこか幼い頃を連想させて、途端に寂しくなる。

ああ、何で私は一人なんだろう。あの人は死んでしまっただろう。

たった一人でここにいるということ。一人で粥を作り、薬を飲んで、自分だけで風邪を治そうとしている。こういうことを自立や成長と呼ぶのなら、この世のシステムは何て哀しいんだろうと私は思った。表面的に見れば、これは若者が直面する何てことない壁の一つで、乗り越えることが全て何だろう。もしかしたら壁ですらない、明日になれば笑い話になっている類のことなのかもしれない。

この部屋を残して、世界が壊れてしまったみたいだ。宇宙に放り出されたシエルターの一つにいるようだ。身体に打ち染みる感情が、妄想の内に生まれた理由をこじつける。溜め息を吐きながら、私は一人で宇宙を旅した。辛い理由を探しながらも、未知に関する夢想は楽しく、本筋を忘れさせる。

白黒のSF映画で見た、小惑星間を飛ぶカプセル。小さな窓から顔だけ覗けるベッドは棺桶に似ていた。自分以外の生命体が近づきボタンを押すまで、そのシエルターで眠り続ける。その間夢を見るかは映画じゃ分からなかった。私は見ないと思う。夢を見るところは、精神で起きているということだ。時に本物と思ってしまうぐらいの錯覚は、相当のエネルギーを要するのではないか。それにそんなに長い間―映画では確か一億五千年―夢を見ていられるというのなら、それ

は不死と同等だろう。そんな幸運を約束してくれる機械などあつていいはずがない。いつまでもいつまでも、空想の中、自分の望む人々と笑い合う。そんなことをたった一つのカプセルで実現出来たら。それはきつと何かへの冒険だ。

否定しながら、その機械の存在にどうしようもなく惹かれている。妄想の起源はすでに遥かだった。糖衣で包んだものよりも、それ自体が甘いものの方が欲をそそる。しかしはたと気づいた。本当にこれは不死と言えるのだろうか。案外とこれは、死に近くないか。永遠に、あなたの夢を見て眠りた。恋人を前にして死ぬ人間の言葉は確かにこのようだった。ああ、そうか。私は合点する。

人は死にたくなる。
人も、咽びも、塩辛い涙も。死という夢の中でなら何もかも可能だ。深い湖の底、暗い森の奥、朝露光る草地、白亜の宮殿。明け方、白昼、宵、闇。全ての時間と場所の中で、彼の人と愛し合う夢を見たら。喉は蜜よりも甘く、返って永劫渇き、求めるだろう。

馬鹿馬鹿しい。どうして死に対してまで欲望を抱くのだろう。だいたい仮説だ。天国や地獄、霊、魂。そんないくつもの仮説の内の一。馬鹿じゃないか。知れるはずのないことを知りたがって、神を称え霊を恐れ、血を流し、眠りを脅かさず、そうやってずっとずっと生きて死んできた。

寝返りを打つ。少し肌寒くなってきた。腕を毛布に仕舞う。今度こそ眠れるかもと思つて目を瞑るが駄目だった。脳内で

思考が氾濫し、放棄することを許さないのだ。

五月蠅い。孤独とは何て五月蠅いものだろう。はけ口を失った雑念が発す、絶え間なき嬌声。それを聞く感情はだんだんに疲弊していく。掻き消すための妄想も、尽きてしまった。何故誰の寝息も聞けない。何故死んでしまった。私の前にいない。

いっとう大きくなるのはこんな叫びだった。熱は何度も出たり引いたりを繰り返し、喉元に溢れる吐き気だけが止まらない。

私は心の中で、何度も何度もいらないはずの人を呼んだ。ここに来て、額に手を置いて、熱を測ってもらいたい。幼子に帰らせてくれる人が、傍にいてくれたらよかった。そしてら縋り付いているだろう。膝の上でぼろぼろ涙を零したいのだ。髪をぐちゃぐちゃに撫でて貰って、背中に大きな温みを貰って。無償の愛があったあの日が、幻の輪郭だけでいい。蘇ってくれないだろうか。

夜が明け、やがて部屋の中がさつな光が差す。感情の波はまるで童話のお化けみたいに、朝がくると隅の方に散っていった。白々しい空気を吸って、私はようやくやく眠りに就いた。

「資本、階級、性別。あらゆるものの分類がなくなりつつあり、その中で人間は——」

伝統的、と講師が黒板に書く。それを私はルーブリーフに

写した。的、の字から引かれた一本の線が三項目、資本、階級、性別、と繋がっていく。単語と単語を線で結ぶ作業は実にシンプルだ。音もなく動いていく列車のような。そうやって書かれた縮図が持つのは、ある種の儂さだと思った。後三時間もすれば期限が切れ、記憶から消えてしまうだろう。明確な意志で書かれていながら、すぐに忘れられるという単調さ。せめてもと、講師の口にする端々を小さな字で書き添えてみるが、効果はあるか知れない。

こんな鉛筆があるといい。書いた字を指で撫ぜると、文字を書いた人の、当時の考えが分かる鉛筆。そうすれば自分がどういうことを理解していたか思い出せるのに。嫌、やっぱり駄目か。書きながらまったたく別なことを考えていたりもするから。余計分からなくなる。今だってそうなのに。

「——観念の揺らぎ——彷徨って——」

それにしても、熱が下がってから数日、学校に来ようと思えたのは奇跡だった。固定された机と椅子は嫌い。女の子達の持つ鞆のエンメルは毒々しい。緑色に塗られた木製の窓枠だ。目障りだ。それでもここに来ていた。私を管理する人はもうどこにもいないのに。まるで体に機械を埋め込まれ、操られるみたいにして学校に来た。昔叩き込まれたきたような規律が、どの感情も喚起させないで首をもたげてきたような。よく分からないがまったたく運がいいことだと思ふ。外界からの刺激に押されて、他の思考が収まってくれたから。少し喋ったとしても未来の鉛筆についてだとかで、これまでの

ことも現在も、これからのことも考えないでいられる。少し射程から外れた位置で、のんびり空でも見上げているような感じだ。実際今日はとてもいい天気で、窓側の席にすればよかったかもしれないと今更思う。青い空と、嘘のように元氣な常緑樹。

「——何も持ち込まない純粋な関係性。自分自身の感覚や感性で付き合うということは、一見とても美しい。何故ならお互いを愛することが条件だから……ちよつと大袈裟すぎるか。まあ、気に入る、ぐらいだろうな。——この関係は枠に入らない。丸くならない」
ガッ。

「点、なんだ」

講師が白墨の先を黒板に打ちつける。白い粉の塊が一点、緑の中に浮かぶ。少し大きな音がしたのだから、皆黒板に注目していた。勿論、私も。急に思考が現実引き戻される。

「点は小さい。周りと繋がっていない。だから」

ガン。暴力的な音に思わず肩が跳ねた。講師が黒板を拳で叩いていた。その衝撃で、白い塊が元の粉に戻りポロリと落ちる。

「すぐに崩れてしまう」

言いながら講師は僅かに残った点を指でなぞった。五十センチも線を引かないで、その白は消える。白の続かなかった緑だけの空間を私は見つけた。線ではなく、その空虚こそ答えであるような気がしたのだ。

「——それじゃあ、今日はここまで。再来週はこの続きから。来週は休講なので間違わないように」

チャイムが鳴った瞬間、ペンを片付ける音がそここに響き渡り、その音に被せるように講師が挨拶して出て行った。音は音でなく大半が言葉となり、固定された机と椅子の上を飛び交う。エナメルバックの底に付いた金具が、机の上でカチツ、カチツ、と音を立てていた。

今日はもう授業がない、真っ直ぐ家に帰ろう。

立ち上がっても古い椅子はそのままなので、手でもとのように折り曲げた。足下に置いた傘を取り、鞆を肩に掛け教室を出た。

校舎から出た瞬間、光が目を射た。それから包まれていると感じる。もう冬と言っているんだろう。マフラーをしている女学生を見かけたから。

冬の日差しは、針の欠けたオルゴールみたいだ。複雑な音色を響かせない。メロディーを忘れた歌。キン、と最初の音に驚かされて、その後はジリジリと機械が回る穏やかな音だけが聞こえた。でもその途中、見過ごしてしまいそうなくらい短い時間、欠けていない針が小さな音をたてる。今度は驚かない。口元に笑みが浮かぶ。暖かいと素直に喜ぶことが出来るのだ。

陽だまりを選んで歩いていると、周りにいる女学生の、風

貌の華やかさばかりが目についた。ラベンダー、コスモス、マリーゴールド。様々な花色のアイシャドウが目蓋に踊っている。華奢な鞆を掴む白い手は、関節の一つ一つも彫刻のように美しかった。彼女達の頭の中にも、欠けたオルゴールが鳴るだろうか。そんなことを考えている内に、もう出口まで来ている。昼食を外で摂ったり、私のように帰る学生が前を歩いていた。

昔彼女達に抱いていた感情——羨望のような妬みのような優越のような——そんなものは最近、一切なくなつた。代わりに彼女達の服の色とか、花や光の感じ方とか、今までどうでもいいと思つていたことが気になる。昔とは明らかに視点が變つていた。

同じ黒い服でも、厚みのあるもの、薄いシフォンのようなもの、わざと洗いざらしたようなもの。丸いフォルム、四段のフリル、ピンと張つた固そうな布地。ピンクも黄色も、じつと見ているとその奥に何か見えそうな気がした。どうしてそんなものを着ているのかとか、その裾が足に掛かる感じはどんなんだろうとか。相変わらずエナメル製のギラギラした感じは好きになれない。けれど流行の中にも彼女達の趣向や気分やらの反映が、見られるのではと思つた。煌いて見える彼女達の風体と、共通する部分なんて私には一つもないのに、何故か共感出来る。彼女達だつてオルゴールを持つていていいんじゃないかと思つた。黒ずんだ金色に光る、ガラスの中の回転円筒。彼女達にだつてその音が聞こえるはずだ。

彼女達の頭の中には、友達、恋人、ファッション、カラオケ、単位、そんなものしか蠢いていない、訳などあるはずがない。もう以前のような優越は感じなかった。私と同じように、誰だつて動かされている。空気と天気を持つ魔法の言葉に。気持ちいいと思つた瞬間に、彼女達の指紋はガラスケースにこびり付いている。

こんな風に考えるようになったのは、きっと雨に打たれて寝込んだのがきっかけだ。がなる孤独に耳を覆われれば、自分がどれだけ楽園に遠いか思い知らされる。私も所詮、人を求めるのだと。

私の前を歩いてきた集団が途中通りかかった喫茶店へと消えていき、途端に辺りが静かになつた。喫茶店の窓からは水を吸わない人工のアイビーや、花柄の覆いが張られた電灯などが見えた。トマト系のソースを煮込んだ、甘いような酸っぱいような匂いがしている。少し幸せな気分になりながら、ガードレール脇を歩いた。だんだんその匂いは遠のいて、代わりに緩やかな排気の匂いが鼻をついた。閑静な住宅地を抜けて、商店の連なる場所に出てきていた。この通りに繋がつた路地の一つに、私の住むアパートがある。

街は昼間らしい平和な賑わいを見せていた。荷台にダンボールを載せた自転車が、ベビーカーの脇を危なげなく過ぎてゆく。少し陰つたところにある八百屋には、蜜柑と林檎が大

人しく並んでいて、小さな古本屋の店先では、眼鏡を掛けた学生風の青年が、百五円の本だけが積まれたカートを物色していた。すっかり裸になった街路樹に、透明の電飾を付けた黒いコードが巻かれている。まだ見たことはないけれど、夜には温かなオレンジが光るのだろう。星の見えない都会の夜空に、飴色のネックレス。

そんな、目に見えるどこか懐かしい風景。それを一旦捨て、私は耳を澄ます。雑踏の中で私は目を閉じていた。

最近少しおかしいんだと思う。もしくはおかしなくらい正常なのだ。耳を澄ますのが私の癖になった。これも熱にうなされた日からの変化だ。私はロサを探すようになった。それは見つからないという前提で。ここにはいないことを理由に彼を探した。絶対に会わないという自信の下で。目も足も使わないでただ耳を澄ます。バラバラ鳴る乾いた足音の中に、たった一本ひゅると咲いた花のような、白杖の音を探す。

これはとても難しい作業だ。目を閉じているということが、まずとても不安なのだ。今までただそこにあっただけの音が、一斉に私へと向かってくる気がした。足音も、車の音も、自転車音の音も、自動ドアの開く音も、話し声でさえ凶器となる。とにかく、不安で口がわなくなると。冬なのに、背中に汗をかく。それに白杖の音というのが難しい。あの音を私は思い出せなくなっていた。あれだけ印象的だったのに、思い出せうとすると胸の辺りがざわめいて、どうにもならない。仕方なく、女性の履くハイヒールやサンダルの踵が持つ、硬質な

響きと絶え間なきが似ているのではないかと思うことにした。いないと分かっている、そういう前提なのに、私は時々目を開けて辺りを見渡した。彼の工場は電車に乗って行くところにあるのだ。こんなところにいるはずがないのだ。そう言い聞かせつつも、私は首を回し続ける。するとそこには決まっただけの、踵のある靴を履いた女が何の気もなく歩いているのだ。私は立ち止まって、彼女達に追い抜かされる。その音とともに背中が最大まで小さくなるのを見送ってから、ようやく歩き始めていた。

今日は女性の靴音も、勿論白杖の音もしなかった。私は溜め息を吐いて歩き始める。通りに溢れる音と光が、身体を包んだ。

世界は驚く程平和で満ち足りている。汚れたアスファルトに引かれた白線の僅かな煌き、日陰に置かれたベンチのささくれ、自転車のタイヤが回る音。全てがゆっくりと私の中で還元される。

声をした。悲痛というよりは可愛らしい、幼児の声が。見ると、少し離れたところで、若い母親がズボンの上から幼児の膝小僧を撫でていた。空いている方の手では、幼児の背に触れていた。それを何となく立ち止まって、じつと見つめてしまう。冬の空に声は高く響くようだった。私はまた歩き出す。この通りにいる他の人達と同様、さっきの平和な情景を胸に留めて。のどかな関係を何度も反芻して、多くの人々がこの世界の誠実さを認めている。そのために幼児は無垢でな

ければならないのかもしれない。平和の創造主は分厚い本を手にした革命の人ではなくて、案外、考えの一つも持っていないような幼児なのではないだろうか。

どんなに無力でも、部品になる。どんな人間でも。心の中で呟いた。一方で、浮かぶ疑問。

そうやって作られた街で、何故ロサを探す？

私は安寧を確認したいのかもしれない。ロサと出会わないことで、静かな波際。誰とでも重ねられる心。それを今私は、失いたくないのだろうか。

だったら、早く帰らなければならぬだろう。私は早足で通りを抜ける。一人暮らしの部屋では、畳に当たる日が私を待っているのだ。それはとても美しい、ありふれた光が。

何を思ったか、散歩に出掛けた。ピンク色の傘を持って。

白状すると、私はあの女について忘れたことなど一日もなかった。私はあの女のことをずっとずっと憶えていた。顔の細かいパーツも、それが載っていた輪郭もよく憶えている。

思えば、平凡な顔立ちだった。誰もが普通に思い浮かべる顔立ち。けれどそれが美しいのだ。大抵の人の顔立ちは減点方式で見極められているように思う。だから欠点の見つからない顔はとても美しい。あの女はそういう顔立ちをしていた。剥いたゆで卵のような、0点の形。

私はロサと女と一緒にいる場所を思い浮かべた。彼らの作

る影は夕焼けが作ったもののようにおぼろげな縁取りで、黒と紫を混ぜたような色をしている。普通の影のような薄墨色ではないのだ。それが妙になまめかしくて憎らしかった。その憎らしさは陽に晒された砂のようなもので、焦燥と言うと意味的には少し違うのだが、漢字の雰囲気と言うと近かった。思わず手の甲を噛んでしまう程に、憎らしかった。

とにかく私はあの女を忘れていない。忘れられないのか、忘れまいとしているのかは分からない。だから外を出歩く時、あの傘を持つという習慣の意味については、不明であった。勿論返すためであるという理屈は、自分でも歯が浮くので違

うと思う。この傘は私にとつて様々な意味を持ち得る。雨避けにも、ステッキにも、道を指す標にも、人を呪う魔術具にさえなる気がした。多様な意味を与える傘の存在は重い。今日も、気づいたら手に取らされていた。

街は年末の賑わいを見せている。ちよつと遠出して、アパートから三十分程歩いたところ、駅前繁华な通りに来ていた。都会の街は純粹な緑が少なく、田んぼなど見かけたことはない。殆どが庭としての木か、街路樹、だらしない雑草だった。だから自然の清々しさを味わうための散歩は、どうしたって出来ない。しようとも思わないけど。

この通りにも、人工的に銀杏の木が植えられていて、近所のものと同じように電飾を纏っていた。ついこの間まで緑と赤のクリスマスカラーで彩られていた街は、絵の具の種類を増やしていた。街灯からは桃色の造花と金のテープがぶら下

がり、店先には紅白の布がはためく。大型デパートの広告に並んだ七福神が、虹の配色を思わせる。店先に立つ人の黄色くて薄っぺらい半纏が、風に波立っていた。

鮮やかな色ばかり目に入るのに、やはり年の瀬だからだろうか。人々の間にはどこか寂しげな匂いが感じられた。冬休みを楽しむ女の子の一团、ジャンパーで着膨れした親子連れ、威勢のいい掛け声、デパートの垂れ幕のゴシック体も、「幸せな年の終わり」を演じているみたいに思える。笑っていない人でさえ、「忙しい年の終わり」の音響効果であるような。

こんな何かに取り残されたような気持ちで、どうして今日を感じるのだろうか。分からなかった。そうやって愕然としている時、私の目はあるものを捉えた。

茶屋の店先。紅白の布を垂らした、テーブルとカートの間のような棚に、急須やちりめんをあしらった茶筒が売っていた。それらには目を引かれない。私が思わず目を見開いたのは、腰を少し屈めてそれを見ている女。

驚く程に平凡だから美しく。

そう気づいて息が止まった瞬間、目ぼしいものがなかったのか、女は歩き出していた。

何で、何でこんなところに。

女はすぐ先にあつた横断歩道を渡っていく。私は自分でもどうしてか分からないが、一度女のいた位置に立ち、茶具を眺めた。そうしてから信号を見る。赤になつていった。どこから、明るい女性の声での宣伝文句が聞こえる。お安く、お

早めに、今すぐ。古いスピーカーなのか、声の末端がピリピリと鳴っていた。そんなささいな音が、大きく大きく響く。(つけられる)

そう思った。この通りは一本道だし、路地に入り込んで、私は女の背中を見失わない自信がある。信号一個分という適度な距離も、おあつらえ向きに思えた。

あの女をつけよう。

私は傘の柄を強く握った。その時ふと気づく。どうやら傘を持つているのは私だけではないようだった。道行く人の手の中に、さりげなく細いシルエツトがある。空を見上げれば落ちてきそうな程の曇天。急に不安が立ち込めてきた。

信号が青になる。

歩き出さない訳にはいかなかった。

女をつけているというよりは、ただ見ているという感じがした。その足取りを必死にたどるのではなく、観察している感じだ。自分の至近ではなく、女の周囲が私のいる場所になる。探偵小説の主人公の気持ちがかかる気がした。

最初、雑踏の中を真っ直ぐ歩いた。女はふと立ち止まり店外に並べられた商品をちらと見ることはあつても、手に取ったりすることはなかった。だから私は比較的ゆっくりと歩くだけで、尾行は容易だった。通りは古着屋、CDショップなど若者で賑わう店並びから、小さなパン屋や和菓子屋などの

落ち着いたものへと変わっていく。それにつれて人通りも少なくなっていく、私が不安になり始めた頃、女が蕎麦屋の角を曲がり路地に入った。髪を一つに縛った横顔がちらりと見える。遠目にも整った輪郭をしていて、どきりとした。私は早足になって路地に近づく。そっと覗いて女の後ろ姿が丁度良く遠くなるのを見計らってから、意を決し進んだ。

そこに私達以外の人間はいなかった。とても緊張する。女には絶対見つけたくなかった。私は傘のナイロン部分を握り締める。柄のつるつとした感触より、この方がずっと安心するのだ。今傘は私にとってお守りの役目。もつとも、この空模様。雨避けの役に切り替わるまではいくらもなさそうだった。

建物と建物の隙間、はびこったパイプしか装飾のない箇所は長く続かなかった。その後はひたすらせめぎ合う窓と窓。もしくは、ぽっかりと空いた汚いアスファルトの駐車場が時々私をびくびくさせた。両脇に建物がないと、見られているみたいで怖い。雰囲気としては、私の今住んでいる地区に似た場所だった。斑の浮き出た緑の植物が、ベランダに並べられているところとか、外壁に入った細かいヒビだとかが。ひっそりと大勢の人が暮らす場所の情景。駐車場の草むらとも呼べない雑草の影から、野良猫に睨まれる。黄色に黒い線が一本引かれた目。胸がざわめいた。

女は迷いのない足取りでスタスタと歩いていく。その機械的な動きが逆に人間らしかった。そこらにいる女性となんら変わらない。私は一瞬迷いのない足取りという言葉に口サを

思い出した。けれどもまったく違う。あの人は恐ろしい程無慮だ。機械には及びもつかない。

私は時々、女がこちらに気づいているのではないかと疑った。わざと私を誘い出しているのでは、と。女に導かれている感が絶えずする。何回か右に左に曲がっているのに、一本の道を真っ直ぐ歩いているような気分がして、今、私は女の後を追っているだけで、自分の意志では歩いていないのだと、そんなことを実感した。女が一度も振り向かないのが、好都合だが不気味だ。気を緩めると、ここまでつけてきたことを、後悔してしまいそうになる。

薄れた水色のアパートの角を、女が左に曲がった。私も早足で角に来て、覗く。女が曲がればそうしていた。ある程度女との距離を計らねば、と思つての行動である。角を曲がった先に見えたのは、横に広いアパート。そこで行き止まりだった。私は水色の角に隠れたまま女を見張った。クリーム色の外壁に、小豆色の屋根の建物。女は剥き出しになった鉄の階段を上り、二階の廊下に姿を現す。そして右から三番目の扉の前で、止まった。

私は息を潜めて見ていた。距離は十分にあつた。けれども女がすぐにでも振り向き、見つけられてしまうような思いが消えない。

扉は内側から開いた。女を出迎えたのは、私のよく知っている、いや、正確には何もかも分からない、けど心から手を伸ばし合った人だった。

どんなに距離があっても私にはその顔が分かった。

世界が止まったような感触は一瞬。扉は女を中に入れるとすぐに閉ざされた。私はフツフツと、何かが沸いてくるのを感じた。

私は走ってアパートに向かった。そのままの勢いで階段を駆け上がり、女が消えた扉の前まで来る。そこにしゃがみこんだ。そして扉に耳を押し当てる。冷たさに耳が凍った。

思えば最初から予感があった。女をつければロサに会える。でも、私はこの予感を恐れていたのだ。ロサと女が会う瞬間なんて、本当は見たくなかった。そう、私がロサに会う訳ではないのだ。ロサに会えるのは、あの女なのだ。

キシッキシツと床を踏む音がする。私は自分の部屋の匂いを思い出した。昔住んでいた一戸建てとは違う、よく分からない接着剤みたいな匂い。私はロサの部屋を、自分の部屋の設計と重ね合わせるようにして想像した。光の入らない台所、黄ばんだ畳。その畳の部屋にロサは女を招き入れる。部屋の真ん中には丸いちゃぶ台がある。右手に押し入れ、左隅にタンスがある。両手をいっぱい広げたぐらいの大きさの窓が正面にある。私の部屋にロサがいる。

何か床に置く音がした。ゴン、の中にココロ、と一つではなく複数なのが落ちる音が聞こえていた。

「今日はどんなのがいい？」

「いつもと同じ。君が好きなものを読んでくれれば」

「そう」

思えば、女は肩にトートバックを下げていた。その中に本が数冊入っていたんだらう。それが不揃いに落ちたのでは。くつきりと浮かび上がる実像。ちゃぶ台の周りに座布団は二つあり、それぞれに二人が座っている。女がロサの正面、ロサが女の正面。真つ直ぐに向かい合っている。

そうやって像を取り繕いながら、私はあることを思い出していた。

朗読ボランテイア。

——文字を読むのが困難な方に、本を読み聞かせるボランテイアです。

パリリ、とページを捲る音、が聞こえた気がした。勿論、実際はそんな小さな音聞こえるはずがない。女の澄んだ声が鉄扉越しに響いた。

「——」

哀しい物語、と呼べばいいのだろうか。盗み聞きという不徳な方法ではあったけれど、私は心を動かされた。

何てことのない小説。二人の人間が寄り添って、避け合っていく物語。彼らのいる世界は波のない湖で、ノイズに満ち

たビル群だ。水色の道を渡っていくように、清純に零れた言葉。朧な満月。手の平、五本指の温み。落ちていく、花びら。女の朗読は声を感じさせなかった。だんだんと自分の内側から、目で字を追って読む時と同じように、登場人物の声が聞こえてくる。視覚で捉えていないのに、字幕映画を見ているような不思議な気分がした。

「——と、今日はこれでお終いね。よかったわ、丁度一冊読み終わって」

「そうだね。うん、今日もありがとう」

コンクリートの床に突いた膝が、痛く冷たい。長い時間が経っていた。それでも私は彫像のように耳を澄まし続ける。「まだ次の人のところに行くまで、時間、あるから……やって欲しいことってある？」

「ない。何もないよ」

日常的な会話はただなされていく。女が立ち上がったような心配がした。

「ないってことは絶対ないわ。お米とぐ？ お風呂は洗ったの？」

「いいよ、いい。君は何もしなくていいんだ」

ロサが首を振る仕種を思い出す。調度の殆どない部屋で、二人の視線が交される。妄想の中のビジョン。彼の唇の形。彼の。

「何もなくていい。何も。今日はただ、いてくれればいい」
声が太く、しっかりと感じられた。心臓の鼓動が速い、速

い。口がわなないて、部屋のビジョンが消えていく。代わりに私の脳内を染め上げるのは——ロサだった。

トントン、と男か女、どちらかの動くがした。それで終わりだ。私は耳を離す。目の前にあるのは、聞いたことのない名字が書かれたプレート。他人の家のドア。認識はゆつくりと、しかし冷静に哀しみを突きつける。涙になるはずの感情が、淡々とした事実で冷やされ氷になる。溶ける術は見出せない。胃に積もっていく、シンとした重さ。

ロサの、いない世界。

私を女神と呼んでくれた男の人は、もうどこにもいない。

全てが私の妄想で。

顔が熱くなる。傘を手を立ち上がった。とんだ勘違い。そんな言葉が浮かぶ。どうしてここに来たのか、思い出せなくなってしまうそうだった。前が見えなくなりそうで、どこに行くのか自分でも分からなかったけれど、足は自然に元来た道をたどる。

元来た、道。

駐車場の脇を通った、建物の隙間を通った、オレンジ色のライトに照らされるパン、障子を背景に並べられた和菓子、店頭でサツカーを映す液晶、カランカランという鐘の音に沸く歓声——繁華な通りはメリーゴーランドのように、きらきら光りながら私の後ろに流れていく。イルミネーションの飾色が、ふわりふわりと揺れている。

道行く人が傘を差していた。笑顔、笑顔、笑顔。私の鼻の

頭にも、冷たく白い一粒。だんだんと増えて、空が明るくなる。街に雪が降っている。

マイルがところどころ欠けた階段を駆け上って、駅に入り、切符を買って。私に行き着く先が一つだけあった。電車のないホームに粉雪が舞っている。私はただ肩を震わせて、待つ。

私はロサの手を誰かに捕られてしまうのが嫌だった。

そもそも、私は一人で生きられる人間になりたかった。両親が死ぬ前からそれはずっと思っていたことだ。私は自分が酷く醜くて、外においても内においても、そうであると思っていたから、人に愛されるなんてないと思っていた。自分には人の目を引くところがない。どこにいても一人ぼちな気がして、これは運命なんだと思った。愛されることも知らずに、私は死んでいくんだらう。だから一人暮らしをしたし、車の免許も取った。年老いても、一人でいられる人間になろうと思った。

けど、そしたら、ロサに会って。

私は唯一の役目を与えられた。女神になって、彼に視覚を与えようとした。この世に、自分を縫ってくる人がいる。そのことが私の快楽だった。どうしてか孤独を拭えない私に、水晶の鎖。墮落した関係でも、私の中では透明だった。

あの工場にあったバラが好き、緑が好き、アスファルトが好きで、今も変わらない。本来花を愛でる場所ではないそこ

で、生きている彼ら。工場の排気で光合成し鮮やかに咲く彼らに、私は憧れていたのかもしれない。不釣り合いなもの程、切なさ胸に刺さる。自分にとつてふさわしくない世界でも、美しく咲いていければよかった。

彼の肌の感触、乾いていたのも湿っていたのも。長い指、一筋の汗、背中を触った時、心臓に耳を当てた時。何にも代えがたい温もりを愛している。愛を交わすための動作をしたことはないけれど、私の頬に触れた手を信じていいだろうか。不健全で清すぎる禍々しさを昇華したい。本来に戻っていく彼の底に、一体どんな思いがあったのか。失望だとしても、哀しい記憶で終わらせない。

しばらく電車に揺られて、思いに揺さぶられて。同じことを繰り返す自分に、もう呆れさえも浮かばなかった。

電車を降り、改札を抜け、駅を出る。開けた視界に、膨大な数の粒が舞う。この地方にしては大雪だった。

一人で生きていけるようになりたかったのは、こんな自分を愛してもらいたいからだ。父と母の葬式を思い出す。多く人が流す涙に私はただ圧倒されていた。とても怖かった。

人の死には、こんなにもたくさん哀しみが纏わりつく。そしてそれが理想なのだ。私は死のイメージを恐れつつも、その奇妙な魅力に憑かれ始めていった。死に開放感や芸術性を求めるようになったのだ。それに必要なものは愛である。永遠に見飽きぬ夢と、涙の贈り物。

がむしゃらにならないと駄目だと思っていたのに、ロサが

現れた。だけどロサがくれたのは、求めていた愛じゃない。私は騙されたのだ。私にかけられた魔法は解けてしまった。きつと彼のもの。

雪道を必死になって駆けた。自分でもどうして走っているのか分からない。でもそれで正解だ。私は走るのが好きじゃないから、目標を持って走ったりはしない。走るのはたどり着くためじゃなく、逃げるためだ。なら、私は何から逃げようとしているんだろう。

舞い散る雪の中に工場フェンスが見えてきた。手袋も何も着けていない指が、千切れそうな程に痛い。ただ、遠くからその姿を見るだけで満足すべきだった。もうこれ以上は踏み込めない。だからこそ、あの場所へ。

私は今、元来た道に戻っている。私の針がねじれて今の私になったのは、きつとあの夜からだ。水溜りに浮かぶ、ポールズ・ヒマラヤンムスクス。ほら、こんな雪みたいに散って。あそこに帰れば、私は落とした螺子を拾いに行ける。元の私に、ロサを愛する前の私に戻る。取り戻せない幻想をいつまでも抱えているなんて、虚しくて、馬鹿馬鹿しい。哀しい記憶なら、忘れない。

雲の中に入ったみたいに真っ白だった。その中に堅牢な門は閉ざされたまま。私は立ち尽くす。

文字というものは、冷淡に事実を告げることしか、喜びを見出せない存在なのだろうか。

——先月を以って閉鎖——
変わらないものなんて、ない。

私は工場の人と交流を持ったことなど、一度もなかった。だから私にとって工場の建物自体は、庭に置かれた飾りの石のようなもので、それ以上でも以下でもないはずだった。けれども、活気の失われた今の状況が単純に哀しい。

私は門を越え、堂々と敷地内に入った。無人の工場は、主をなくした庭のように見えた。首のもげた天使の彫像など、単純なパターンのものが似合いそうな雰囲気。それ程に働く場所という感じがせず、無個性だ。薄く積もった雪だけが、非常に美しい。白くなった芝生の上に、私の足跡がそっと残る。思い出のある場所、小屋や様々なバラが咲いていた場所に、私は行かなかった。何の思い出も見出せないところで、ただ立っていた。灰色で覆われた廃墟。一人生き残ってしまった。

最初から忘れるつもりなんて、なかったに違いない。ずるい私だ。忘れられないことを、工場の存在に求めようとした。電車で行ける距離にそれがあるから、目で見て、肌で感じる事が出来てしまうから、私は幻想が捨てられない。再認識しに行くのだ。けれど、工場はなくなった。私が女神と呼ば

れた証拠は、跡形もなく消え去っていた。確認しなくても分かる。小屋に行つたところで、私がそこに生きていた証拠などありはしない。たとえあつたとしても、それだけでは十分で、余計虚しくなるだけだ。白い、赤い、柔らかない。バラの前での儀式の痕跡は、どうやったつて残りはしなかった。だから私はどこにも行かない。行けない。

ロサ。
胸の中で呟く。ロサ。ロサ。ロサ。あなたの教えた偽りの名が、私は忘れられない。何度呟いても体が冷たいのはそのまま、絶望感に倒れてしまいそうだ。けれど私は幸せだった。お互いかけた魔法は解けてしまったけれど。

魔法を解いたのは何か。決まつてる。楽園にとつて汚らわしい邪念、私の恋だ。ロサの熱を、汗を、皮膚を、求める感情に名などいらなかった。それでもこう呼ばずにいられないのは、私が人間だからだ。人間は気持ちを止めることが出来ない。恋は多くの苦しみを生む。分かつてはいても、私はロサを愛せずにはいられなかった。彼を愛する理由はいくらでもある。その理由の全てが、本当に彼の存在自体から発せられていること。これが奇跡のように思えるから、私はロサを愛してしまふ。自分に舞い降りた奇跡が、たとえ苦しみしか与えなくとも、偶然を幸福だと思つてしまふ。足を怪我しなければ、ロサがああ夜工場にいなければ、こんな奇跡起こらなかつた。だから私は苦しみを幸福と呼ぶ。ロサを一瞬でも私の所有物にした、巡り合わせに跪く。

私はロサを愛している。

ロサのいない世界はとも美しい。彼が一つの肉体に集約されないで、私の触れるもの、全てがロサになるから。夕焼けも、風の音も、花弁も、唇も。世界は変わった。ロサが生まれ消えていった世界に、私は初めて心から受け入れられたと思つた。

狂つていく音を忘れさせる響き。目に見えない汚れに満ちた世界にも、私はオルゴールを聞く。彼の声を聞いたような気がして、涙が出るような瞬間がいつかきつとある。

庭は終わった。幻想は形を失つた。けれどそれは私の中にあるのだ。凍つた大地の内で、清水が流れ続けるように。私の体を絶えず巡つていく。

私は女神と呼ばれない。それでも幻想を抱いて、この世界を愛している。世界を愛する女神になれる。

特別ななんて一つもないと思つた。きつと今この瞬間にも、大勢の人が、幻想を抱いた神になつている。

目を閉じて、私は雪の降る音を聞いた。シンと凍つてまつさらな、この世界の音を。